

〈論文〉

〈Paper〉

加藤幸子の感覚世界  
The Sense of Kato Yukiko

高根沢 紀子  
Takanezawa Noriko

上武大学経営情報学部 (非常勤), 〒370-1393 群馬県多野郡新町270-1  
*a part-time lecturer, Faculty of Management Information Sciences, Jobu University,  
Shimmachi, Gunma, 370-1393, Japan*

受付 2002年11月11日  
Received 11 November 2002

## 抄 録

加藤幸子は、独特のバランス感覚を持った作家、である。日本と中国、大人と子供、人間と自然という対立する二つの概念を、その独特なバランス感覚で共生させている。加藤の文学を決定づけているのは幼年期の中国体験である。太平洋戦争をはさんでの中国での体験は「夢の壁」(1982) から『長江』(2001) まで書きつながれている。またナチュラリストの肩書きを持つ加藤は、自然を考える作家でもある。〈ヒト〉を絶対の視点としないその文学は独自のものである。

キーワード：加藤幸子；文学

# 加藤幸子の感覚世界

高根沢 紀子

加藤幸子という作家を一言で評してしまふなら、独特のバランス感覚のある世界を持った作家」ということになるだろうか。日本と中国、大人と子供、人間と自然という対立する二つを独特なバランス感覚で共生させている。それが加藤幸子の文学である。

## I 中国体験

加藤幸子の文学を決定づけているのは幼少のころの中国体験だったといっても過言ではない。一九三六年に昆虫学者の父の元に北海道札幌に生まれた加藤幸子は、太平洋戦争開戦直後の一九四一年十二月、父の仕事の関係で一家で中国北京に移り住む。一九四五年国民学校三年生のとき敗戦を迎え、以後一九四七年の帰国まで北京の外人子弟のための国際聖心学校に通う。五歳から十一歳までの六年間の幼少期を中国で過ごしたことになる。敗戦前の恵まれた生活と、そこでの中国人に石を投げつけたというたった一度の経験と、敗戦後の「小日本」（シャオリーベン）と罵られ石を投げつけられた経験との両方をもつ幼少期の特殊な経験は、加藤の文学を決定づけずにはいられなかつ

たのだ。この二重の体験を「夢の壁」（一九八二）、『北京海棠の街』（新潮社、一九八五）、『時の筏』（新潮社、一九八八）、『苺畑よ永遠に』（新潮社、一九九三）、さらに最新作『長江』（新潮社、二〇〇一、毎日芸術賞受賞）と何度も何度も執拗に描いていくこととなる。

加藤は辻康吾と共に編者となり、張抗抗「夏」を始め五人の作家の作品を収めた『キビとゴマー——中国女流文学選』（研文出版、一九八五）の「まえがき」で自らの中国体験のうち特に敗戦後のことを次のように述べている。

子供時代に心に刻まれた印象は、一生かかってもぬぐい去ることはできないものだ。私の周囲の中国人々は、なぜあのようにおおらかに温かく、敵国の女の子を包んでくれたのであろう。私の对中国観が、今でも甘さに満ちたものになるのはそのせいである。

そんな中で、帰国を迎える加藤には、帰国に喜ぶ大人たちを見ながらうつつらとした記憶しか残らない日本より中国に愛着を感じたことが一連の作品には描かれているが、そのような彼女の作品はしばしば『自伝的』であると評される。細部において、加藤が体験したものだとは推測できるのだが、しかし、それ

は現在の加藤の目というより、子供の目を通して描かれているという点において私小説というものは一線を画している。戦争を描いた小説はあまたある中で加藤のそれが異色な存在としてあるのも、子供の観点から描いているからだと言えるだろう。

一九八三年に芥川賞を受賞した『夢の壁』と『北京海棠の街』では戦争中に父の仕事の都合で中国に渡り、戦争・敗戦を体験する幼い佐智の姿が書かれていく。佐智は中国に育った日本人として、二つの立場を経験することで、戦争中に大人たちが犯した行為について罪の意識にさいなまれる。この気持ちを誰にも打ち明けられないまま帰国した佐智は『時の筏』では、日本で帰国子女への偏見に悩む姿が描かれる。やがて引き裂かれた思いの救いをキリスト教に求めるが、文学者である叔父の自殺、信頼していた牧師の失望などが重なって、キリスト教からも離れ、自然豊かな北海道で力強く生きていく姿を描いた。つづく『苺畑よ永遠に』では北海道で大学生活を過ごした佐智が、自然によって癒され、他者と自分の距離を埋められそうになっていく兆しを描いた。

さらに『長江』は中国体験の集大成といつてよい作品である。日本軍が南京を占領した年、林福平（リンフウピン）は南京に生まれ、その前年に藤本佐智は札幌に生まれた。佐智は父の仕事の関係で中国に渡り福平と佐智は日本敗戦下の北京で出会い、多感な少年少女として幸福な時間を共有する。やがて佐智は帰国するが、四〇年後奇跡的な再会を果たす。福平は文化大革命

四

で父と兄を失い、佐智は結婚して二人の娘をもうけたが、夫の暴力に耐えかね離婚していた。そして二人が六〇歳を迎えて再び大陸で出会う。この物語は福平と佐智の両方の視点で交互に書かれている。後半部分がより佐智寄りになってはいるが、二人がそれぞれの素直な感情を語っており、『長江』は一つの物語であると同時に二人それぞれの物語でもある。それが決して、二人の恋愛物語だとか、友情物語だとかという枠には、はまりきらないところが、この作品の面白さの一つであろうし、また飾らない真実を伝えている。『長江』というタイトルは二人を繋ぎもし、また別ちもする雄大なものの象徴となっている。加藤の中でそのように中国と日本は繋がっているのであり、直接戦争が書かれていないまでも、いや書かれていないからこそ、二つの国もありかたを、さらにそれに左右されない国を超えた人間を考えさせるものとなっているのだ。

すべてが『夢の壁』以来の繰り返しなのだが、それは批判されるべきではない。何度も書きつぐことによって作品はどんどん成長していつているのだ。

## II 自然体験

川村湊との対談（「女流作家と語る」④ 自然界の営みをみつめる目）「新刊展望」一九八九・八）において加藤は「人間はとにかく動物であると思っっているわけです」、人間はどうい

う動物なんだろうかとということを考えながら小説を書き、書きながら考えていくというかたちで、何かの答えが出てくるんじゃないか」と述べている。成長する佐智を描くことによってそれを見出そうとする思いが加藤の文学の根底にある。

人間も動物だというのは、当たり前のことのようだが、普段そんなことは忘れてしまい、人間の都合のいい理屈で生きていることを加藤の作品は教えてくれる。

加藤は作家という肩書きのほかにナチュラリストという肩書きを持ち、日本野鳥の会の理事でもあり、幅広く自然保護の運動を続けてもおり、作品の一つの特徴として自然が大きな意味を持って描かれている。

「ぼくのクォ・バディス」(一九八二)では、都会で会社のために写真を撮るカメラマンの「私」がある日自分の中に「鳥」がいるのを発見する。その「鳥」は次第に存在感を増し、捨てたはずの故郷へと「私」を向かわせる。故郷では故郷の発展のために「沼」が埋め立てられようとしていたが、そこに集う一組の白鳥の写真が雑誌に載ることで、「私」は一躍自然保護を訴える有名カメラマンとなり、「沼」には白鳥を見ようと大勢の人がむらがりつつくる。この作品には、そこに作者の自然保護のありかたについてのメッセージを読むことも可能であるが、特異なのは「私の中に鳥がいる」という感覚である。「鳥」は「私」であり「私」は「鳥」であるのだ。

加藤は「人間以外の見ている世界と人間が見ている世界は違

う形や色をしているわけ」で「同じ世界なのに感覚的に全然違うだろうと思う」と述べている。もちろんこの人間以外の感覚というものは想像するしかないことだが、「ぼくのクォ・バディス」で描かれたような形で人間以外の視点から見た小説というものも創造されている。

そのような自然へと寄り添う感覚は、エッセイでも多く描かれている。子供の「蜂が怒って刺した」という言い方は蜂の立場を認識していなければならぬと、その言葉に感動し、「ヘコドモ」の理論と「オトナ」の理論の違いを感じたということが「自然とコドモ」(『私の自然ウォッチング』朝日新聞社、一九九九)に書かれている。この「自然界の多様性を認める」あり方は加藤のどの小説作品にも溢れている。加藤の作品に子供の視点が多く用いられるのもそのせいである。また、都市にある自然の力について、「都市が自然性を秘めている理由は、そこに住む人間が生物だからである。私たちは野の鳥や獣や虫や花と同等の動物なのである。」(『都市に秘められている自然』『鳥のことば 人のことば』ケイエスエス、一九九八)と語られているように、自然は森にだけあるのではなく、都市の中にもある。何故なら人間もまた自然の一員であるからだ。このような一見当たり前のように書いて、そうでない感覚が加藤の文学を支えている。

また、加藤の文学では『土地』というものも重要な役割を果たしている。加藤にとって人生を決定づけたのが、生まれた北

北海道札幌市と中国北京だったように、作品の主人公たちも、生まれ育った土地で運命が決定づけられている。

新潮新人賞を受賞した「野餓飢のいた村」(一九八一)は自閉症の子供が母の友人の紹介で「浦」 という土地に治療のために移り住むという話である。加奈は都会の学校では何もしゃべることをせず友達からも先生からも「人形」と呼ばれているのだが、「浦」では昆虫や植物と交感し、あげくは墓地で死者とまで自由におしゃべりしている。もうすぐダムに沈む「浦」になじんで行く加奈を見て、母親はいらだつのだが、やがて「加奈は私の分身だ。彼女は硝子でできた日常を壊さないように、できるだけ静かに歩いていた」ということに気がつく。「浦」という土地で癒されていくのは加奈のようであって実は母親の方である。加奈は母であり、母は加奈であるのだ。これは母と子供の未分化さが描かれているというより、そう描くことによつて子供の言葉、植物の言葉、土地の言葉が聞こえてくるという構図を持っているのではないだろうか。

加藤幸子は人間であると同時に子供の心、動物の心、植物の心を持つ作家である。その独特な感覚は、作家尾崎翠の文学世界とも通低している。尾崎翠(一八九六―一九七二)という作家は、近年見直されてきた感はあるが、現在もその名前を知っている人はそれほど多いとは言えない。代表作「第七官界彷徨」には、赤毛の瘦せた娘が二人の兄と一人の従兄とともに、床の間にミニ大根や藓の湿地のある借家に住んでいる、というなん

とも形容し難い不思議な世界が描かれている。加藤はその世界に魅せられ『尾崎翠の感覚世界』(創樹社、一九九〇、芸術選奨文部大臣賞受賞)を書いた。加藤は尾崎の魅力を「尾崎翠のそれは、自己も含めてあらゆるものに公平な描写である。」とし、「ヒト」という一種のみが地球を占領しているのではなくて、その他の何百万種の生物がおしあいへしあいしながら、暮らしているのである。そして彼らを見いだすための条件はただ一つ。彼らと対等の地位に、自分の視点を持つていくことだ。尾崎翠が小説の中で試みたように」と語る。尾崎と加藤の文学は一見少しも似ていない。しかし、「ヒト」を絶対の視点としないところに二人の共通点はあるのだ。

加藤もまた、人間を含めた自然を描くことで、独特の感覚世界を持っているのだ。その意味において日本の中でも稀な作家であり、『長江』を書いた今後、続いていくだろうその世界の広がりや深化を期待したい。

## 付記

なお、本稿は、「世界文学」(中国社会科学学院、二〇〇二・四)に掲載された「加藤幸子の感覚世界」(竺家栄訳)の原文を基に、書誌的な注記を補ったものである。